

佐伯地方の姓氏 (七)

—— 高橋氏 ——

佐 脇 貫 一

(会員・佐伯市長良)

◇各流高橋氏を考える

私は数年前「私どもの苗字」と題して、佐伯地方の姓氏を解説したが、その中で高橋氏について次のような記述をした。

古代の高橋氏には物部氏族の高橋連があり、また安倍氏族膳臣(かしわでのおみ)流の高橋朝臣がある。さらにまた帰化氏族である倭漢氏族(やまとあやしぞく)大蔵氏流、大蔵朝臣春実の後で、筑後国御原郡三原庄高橋に起こる高橋氏がある。この末裔である筑前岩屋城主高橋長種は大友義鎮に従属し、大友氏系の一万田氏から鑑種を迎えて養子にした。その鑑種の後を継いだのが吉弘氏から入った紹運(紹雲)鎮種である。以上は大族としての高橋氏であるが、このほか九州に

はさきの大蔵氏族をはじめ藤原姓斉藤氏族(筑前)、藤原姓菊池氏族、同相良氏族等に高橋氏がある。

佐伯地方にも由緒のある高橋氏が多い。鶴見町羽出の旧庄屋であった高橋氏は、もと土佐の領主長曾我部氏の遺臣ということ、同家の墓地には寛永・寛文の年号を刻んだ古い五輪塔がある。この高橋氏については佐伯古老物語に

「東光山大日寺の梵鐘は、元禄十二己卯年九月、羽出浦高橋善右衛門と申す者寄進す。住持は融盛(六代)の代なり。」

という記録がある。

(註)長曾我部氏の遺臣云々の伝承については、元龜元年(一五七〇)長曾我部元親は土佐高岡郡の名族津野勝興を攻め降し、二男親忠をして津野氏を継が

せた。元親は慶長三年（一五九八）六月病没、四男盛親が跡を継いだ。兄津野親忠（孫二郎）と悪く、慶長五年の関ヶ原の役にあたり、西軍に応じた盛親は、兄親忠が藤堂高虎と仲が良く、東軍に感じる気配があるため、出陣にさいして親忠を急襲、殺害した。この津野親忠の重臣に高橋氏があった。

さて、佐伯地方では各地域に高橋姓が多いが、前述したように高橋氏は全国的な大姓である。統計によると、全国総数八十万人にのぼるといわれ、従って高橋の地名も六十か所以上あるという。

佐伯地方の高橋姓は山間部、海岸部とも広範囲に散在している。しかし、集落的にまとまっているのは丸市尾（蒲江町）・小半（本匠村）・井崎（弥生町）・宮野浦（米水津村）などで、佐伯市部の散漫的な分布に比べると由緒ありげである。

ところで既述の高橋連は古族物部氏族で、饒速日命十三世孫物部建彦連公を祖とし、大和国添上郡高橋邑に起った氏族である。しかし、天武天皇十二年、高橋朝臣を賜姓したのは、安倍氏族膳臣流で、この氏は孝元天皇の皇子大彦命の孫磐鹿六雁命に出ている。

景行天皇の東国巡幸のとき、お供をした磐鹿六雁命は、上総国浮島宮でその海で捕れた堅魚（かつお）と白蛤（はまぐり）を調理して、供御に差上げたところ大いにお気に召して、膳臣の姓を賜ったという。この膳臣は大和添上郡高橋邑に住んでいたので、天武朝に改めて高橋朝臣を賜ったのである。

これは古族高橋氏であるが、平安中期以後になると、各氏各流の高橋氏が派生した。すなわち三河高橋氏は藤原大森氏流、駿河高橋氏は紀臣族大宅氏流、伊豫高橋氏は越智氏族、筑前高橋氏は藤原北家疋田齊藤氏流、筑後高橋氏は倭漢氏族大蔵氏流原田氏の族、肥後高橋氏は藤原北家高木菊池氏流と藤原南家相良氏流の二系、このほか清和源氏頼光流、藤原姓秀郷流（大友氏系など）、橋氏族（伊豫橋氏族）などがある。

ここで問題にしたいのは九州各地方の高橋氏であるが、まず豊後の大友氏ともっとも関係の深い筑後高橋氏について述べることにしよう。筑後高橋氏は帰化氏族の大蔵氏流で、劉姓を名乗る原田氏の族、筑後御原郡三原莊高橋（現三井郡太刀洗町）に起った氏族である。

◇筑後高橋氏と大友系高橋氏

天慶三年（九四〇）平将門の叛乱に呼应した藤原純友は南海に叛し、公衙官船を襲って略奪をほしひまにしました。（このとき純友の次将となった佐伯の是基は海賊をひきいて豊後、日向の海岸を荒し、佐伯院を掠奪した。）

天慶四年（九四一）五月、朝廷は藤原忠文を征西大將軍に任じ、源経基、小野好古らを南海追捕使として、純友一味を討伐させた。瀬戸内海から南海道（四国南部）方面にかけて、掠奪乱妨を続けていた純友らは、一転大宰府を目指して九州に上陸、博多津付近を占拠した。追捕使小野好古は対馬守大蔵春実、伊豫守橋遠保らと共に博多津を急襲、集結した賊軍を撃破した。大敗した純友は小舟に乗って伊豫に奔ったが、追捕の橋遠保のため誅滅された。

この乱にさいして殊勲をたてた大蔵春実は対馬守兼大宰大監となり、その子種光は大宰大監、孫種材は刀伊の賊の侵寇に功を立て壹岐守兼大宰大監となって、岩門将軍と称した。大蔵氏は種材のときから岩門氏を名乗ったが、代々大宰府官として大監・権大監・少監等の職を世

襲した。この大蔵氏の嫡流が原田氏で、岩門大監種平の子種直は、平清盛が大宰大貳になった頃、平氏の家人となり、筑前原田荘に拠った。これが原田氏の始祖種直（また種成）である。（原田氏については後述する。）

原田種直の弟種俊は筑後三原荘に住み、三原次郎と称したが、種直の四男種泰は種俊の猶子として三原郡高橋に居り高橋四郎と称した。延元二年（一三三七）種泰の後という高橋光種は、足利尊氏に仕えて鎮西檢断職（鎮西探題の管掌で、刑事犯の検審・断罪を掌った職）となり、下高橋に城を築いて代々その職を継承したが、七代の孫三河守長種に至って嗣子がなく、鎌倉以来の名家も断絶するかと思われた。天文の末、家臣らは議って高橋家存続のため、大友一族から養嗣子を迎えたいと、大友宗麟（当時は五郎義鎮）に願ひ出た。宗麟は同族の一万田親敦の次男左馬助をして高橋の名跡を継がせ、高橋三河守鑑種と名乗らせた。

高橋鑑種は弘治三年（一五五七）秋月の古処山城主秋月文種が大友氏に叛したので、これを討伐しその功によって筑前御笠郡を与えられた。鑑種は大宰府の宝満山に宝満城を築き本城としたが、当時豊前に進出し、さらに

筑前を覗っていた中国の毛利元就の勢威が強く、筑前の諸城主はいずれも毛利氏に款をおくった。

無二の大友方であった高橋鑑種も、実兄一万田鑑実にからまる事件から、宗麟にふくむところがあり、また毛利方に対する大友氏の軍略にも不服があって、永禄十年（一五六七）七月、ついに大友氏に叛旗をひるがえした。この鑑種の叛が動因となって、秋月、筑紫、宗像、立花等の各城主が毛利氏に通謀し、いわゆる豊筑動乱期に入った。

永禄十一年（一五六八）八月、秋月種実が大友方に降り、続いて城井、長野、千手、宗像らの豊筑諸城主も大友方になったので、筑肥の間にあった大友軍は合流して宝満城を包囲した。そのため鑑種は大友軍の重囲の中に孤立、ひたすら毛利軍の約した来援を待った。

永禄十二年（一五六九）正月、大友宗麟は豊後を發つて筑後に入り、高良山に本陣を置いた。それは肥前の龍造寺隆信がかねてから筑前の秋月、高橋と結び、中国の毛利と通じて肥前国内の大友方を攻撃したためで、宝満城を囲んでいた戸次（鑑連・後の立花道雪）、臼杵（鑑速）、吉弘（鑑理）らの主力部隊は、宗麟の肥前攻めに

従軍、佐嘉（佐賀）方面へ移動した。

一方、豊筑制覇の望みを捨てぬ毛利元就は、永禄十二年三月、吉川元春、小早川隆景を先鋒に、四万の軍兵をもって関門の海を渡り、門司城を奪い豊前に進出、企救郡三岳城の長野氏を屠って、四月はじめ大友方の拠点筑前の立花城を包囲した。

大友方としては立花城を失うことは、財源博多地域を失うことになるから、宗麟は急遽龍造寺氏と和睦、戸次、臼杵、吉弘の三将を立花城救援に赴かせると共に、高良山の本陣を中心に九州五か国の軍勢を集結、来るべき毛利軍との対決に備えた。

宝満城の高橋鑑種は毛利軍の立花到着を歎び、これと連絡をとって、南北から大友軍を挟撃しようとしたが、宝満城を囲む大友軍はしだいにふえ、吉岡、斉藤、志賀、田原ら諸将の率いる兵数は二万余にのぼり、とうていこれを撃破して毛利軍と連絡をとることはできなかった。

立花城は毛利軍四万の猛攻をうけ孤立した。守将鶴原、臼杵、田北の三将は、密使をして命運つきた孤城の窮状を訴えたので、宗麟はその善戦をねぎらうとともに開城を指示したが、彼は胸中に毛利軍との決戦を期していた

のである。五月十八日、いわゆる多々良浜の合戦が行なわれた。そして大友・毛利両軍は多々良川を挟んで対峙し、持久戦となった。この状態は五月から十月まで続き、毛利方は宝満城の高橋鑑種を救うこともできず、徒らに拱手傍観するのみであった。

永禄十二年十月、大内氏再興を夢みた大内輝弘が華兵し、毛利元就を愕然とさせた。「豊前・筑前を手に入れ候はずば、人数を引くまじく候」と、七十三才の老体に異常なまでの執念を燃やした元就ではあったが、やむなく立花城包囲の吉川、小早川両将に退陣を命じた。十一月十五日、折からの震まじりの寒風を衝いて、毛利軍の撤退がはじまった。大友軍はすかさずこの機を捉えて進撃にうつったが、名島浜から小倉津まで延々十余里の間に、打ち捨てられた毛利軍の死屍は三千四百余にのぼったという。

力と頼む毛利軍が筑前から引揚げてしまったので、高橋鑑種は進退窮って十一月下旬、遂に宗麟に降伏を申し入れた。宗麟ははじめ鑑種の降伏を許さなかったが、同族一万田氏の取りなしで一命を助けられ、豊前小倉に移された。鑑種は法体となり宗専と号したが、もはや昔日

の勇将のおもかげはなく、うつうつとて遣り場のない気持ちの家臣たちに投げつけるのだった。老臣北原伊賀守は一族の者や彼に同調した武士ら三百人と共に、鑑種のもとを去り故郷の筑後に赴いたが、やがて伝手を求めて豊後にいたり、宗麟に高橋家再興を訴えた。宗麟は北原伊賀守らの訴願を許し、吉弘左近大夫鑑理の二男弥七郎鎮理をして高橋家を継がしめた。これが高橋主膳兵衛鎮種で、後の紹運（紹雲）である。

豊前小倉にあった鑑種入道宗専は、老臣北原らが吉弘鑑理の二男鎮理を迎えて、高橋家の当主としたことを知り、秋月種実の弟元種を養子にし、豊前小倉城を譲った。ここにおいて筑後高橋氏は二家になり、吉弘系の主膳兵衛鎮種は宝満城にあって宗家を継ぎ、一万田系の鑑種は居城小倉を秋月文種の二男元種に譲り高橋氏を名乗らせた。

◇高橋紹運と立花宗茂

天正十四年（一五八六）七月、九州制覇を目指して北上した島津義久は、肥後をその手に収めて筑後に入り、蒲池・問註所・三池・草野・星野・江上等の郡一郷の

領主たちを降し、肥前の龍造寺・有馬・松浦・高来等の諸豪を味方にして筑前に入った。すでに秋月・原田・城井・長野・千手・高橋（元種）ら豊前、筑前の諸城主は風を望んで雲集し、島津軍の兵力になっていた。筑前に入った島津軍はまず筑紫氏を攻撃、広門の居城勝尾城（現鳥栖市牛原・肥前に属す）をはじめ筑紫方の城砦をことごとく攻陥した。七月十日、筑紫広門は島津の軍門に降り、同十二日島津軍の主力は御笠郡に侵入、宝満・岩屋の両城を窺った。高橋鎮種入道紹運は、七百数十人の勇士と共に自ら岩屋城（現太宰府町四王寺山）に籠り、宝満の要害には筑紫、高橋の族党、老若男女、病人等に移し、長子統虎（立花道雪の養子・後の立花宗茂）が守る立花城を筑前最後の防衛線とした。

岩屋城の攻撃は七月十四日にはじまった。島津軍の大將は伊集院忠棟、彼は全兵力を投入して戦ったが、紹運の絶妙な指揮で、寄せ手は多大の犠牲者を出すばかり、血戦十日余りようやく二十六日未明にいたって外郭砦を破ったという。岩屋城が陥ったのは二十七日午後五時ごろ、大将高橋紹運の自刃によってである。紹運時に三十九才。岩屋・宝満両城を陥した島津軍は、筑前各地を席

捲して博多津をその手に収め、八月十八日を期して立花城の総攻撃を計画した。

しかし、そのころすでに大友宗麟の訴えを機とした豊臣秀吉の上方軍が発向し、毛利の部将神田忠元の三千人が早鞆の瀬戸（関門海峡）を渡り、続いて八月十六日には小早川、吉川、黒田（孝高）の軍勢が大里柳ヶ浦（北九州市門司）に上陸していた。上方軍来るの報は逸早く島津の陣にも達した。八月二十三日、立花城包圍陣を解いた島津軍は、二十四日博多の街を焼払って南下した。

これを追撃した立花統虎（宗茂）は、二十五日島津方の星野吉実兄弟が籠る高鳥居城（粕屋郡須恵町）を攻め落とし、続いて岩屋・宝満両城に押寄せた。岩屋城には秋月種実の士桑野某以下三百人がいたが、立花勢に攻めこまれ一戦も交えず遁走した。岩屋を奪回した統虎はさらに宝満城を攻め、城中の秋月勢を追い出した。

秀吉の九州征伐後、高橋紹運の長男で、立花道雪（鑑連）の後を継いだ統虎は、筑後柳川十三万二千石に封ぜられた。高橋家を継いだ二男統増（後直次と改め、柳川立花家の支藩となり、立花氏を名乗る）には筑後三池一万八千石が与えられた。また鑑種の養子高橋元種は日向

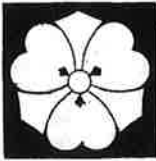
国臼杵郡あきた（延岡）四万石に封ぜられた。この大友氏系高橋氏は大友氏と同紋衆とあって「杏葉ぎょうよう」を家紋にしたが、宗茂（統虎）・直次（統増）兄弟にはじまる立花氏は「祇園守」を本紋、「杏葉」を替紋にした。

◇その他の高橋氏について

次は肥後高橋氏について述べよう。肥後の高橋氏は菊池氏系と相良氏系の二家になっている。菊池氏は通説では藤原北家道隆流で、刀伊の賊撃退に力戦した大宰権帥隆家に出ている。この隆家の子が経輔、その子が政則で菊池氏の始祖ということになっているが、尊卑文脈によ



杏葉丸



菊かたばみ

ると、隆家も経輔も大宰権帥に任じて九州大宰府に下向したことが、寛仁三年（一〇一九）三月、隆家らが力戦して来寇した刀伊の賊を撃退したことなどは事実だが、彼らはいずれも任を了えて帰京し、隆家は正二位中納言に、経輔は権大納言に任ぜられている。

菊池系図では通説どおり、

○通隆―隆家―経輔―政則

となっており、肥前高木氏の祖文時と同祖、政則と文時は兄弟あるいは叔姪しやくしやくの間柄になっている。そこで菊池系図、高木系図の所伝を総合すると、菊池・高木両氏は同族であり、ともに大宰府に出仕した在庁官人の末ということになる。彼らはその所領（菊池氏は肥後菊池荘、高木氏は肥前小城郡高来別符）の地頭、名主みやうしゅであり、武士化したとき、その祖先を大宰権帥を世職のようにした中関白家（道隆流）に結びつけたものといわれている。

ともあれ菊池氏系高橋氏は政則の子則隆から出ている。

○政則―則隆―政隆（西郷太郎）―隆基―隆季

隆房（山崎氏祖）

経政（山鹿太郎）……高橋氏祖

山鹿太郎経政は肥後山鹿郡高橋荘（肥後鹿本町上高橋）に住んだので高橋氏を称したものであろう。

相良氏は藤原南家流で、工藤介為憲の後、遠江守維兼（遠藤氏祖）の孫周頼が遠江国相良に住み、相良氏を称したもので、周頼五代の孫相良三郎長頼のとき九州に下り、求磨くま郡多良木荘を領したが、長頼の子頼之は山鹿郡高橋に住み高橋氏を称した。これは時代的に見て、菊池

氏系高橋氏の名跡を継いだものらしい。なお相良氏系高橋氏は「長劍梅鉢」「丸に三柏」を家紋にする。

筑前高橋氏には藤原北家秀郷流、下河辺庄司行義の孫野本左衛門尉時員の後というものがある。家紋に「丸に三柏」「竹笠」を用いるから、相良氏系高橋氏と何らかの關係があるのではなからうか。また相良氏と同族である狩野氏族に遠江国城飼郡高橋郷に発祥する高橋氏があるが、この氏は「一蓋笠」「丸に九枚笹」を家紋にする。

清和源氏頼光流という高橋氏の系譜は未祥だが、家紋は「丸に釘抜」を用い、また橘氏族の古曾部入道永愷の裔平太能光も高橋氏を称したが、この系統は家紋に「劍酢漿草かたばらみ」を用いるという。

天保末年の「御家中席帳」によると、旧佐伯藩士にも高橋氏が二家ある。御取次（上士）の高橋貞と御中小姓（中士）の高橋曾兵衛である。

それにしても佐伯地方の高橋氏はどのような系統に属するのであろうか。筑前・筑後・肥後・伊豫の各地にはそれぞれ高橋という地名があり、いずれも高橋氏の発祥地になっている。系譜（系図）や伝承・家紋などを手がかりに調べてみたいものである。

（つづく）

表紙解説

潜龍塔について

この五輪塔には「潜龍塔」と刻銘があるのみで、他の文字は何もない。「潜龍」とは

・水中や谷間にいて、まだ天にのぼらない竜のこと、
転じて、世に出ないで隠れている聖人、まだ活動をする機会を得ない英雄をいう（広漢和辞典）

・（日本国語大辞典も右にほぼ同じ、引用例文が多い）
池や淵にひそんでいて、まだ天に昇らぬ竜の意、
暫く帝位に登らず、これを避けている人、また、ま

だ風雲に際合せぬ英雄・豪傑などをいう（広辞苑）

この塔は佐伯市市福所いちらふせの小高い杉林にある。総高二mという巨大な五輪塔である。付近には「寺屋敷」とか、「塔のもと」とか寺院に關係する地名が多い。この塔の外に三十数基の大小の五輪塔・宝篋印塔があり、中には「建武」の年号が読めるものもある。

富来隆氏は『佐伯史談』一二九号の論文で「佐伯是基を祀つてのことではないのか」と言っておられるが、果たして誰を祀つたものか、謎に包まれた塔である。